

井伏鱒二「夜ふけと梅の花」をもとに書いたものです。

"ふと振り返ると、両側から押し迫られて狭く薄暗い、これまでやって来た道のりの先だけが針の穴のように  
わずかにひらけていて、明るい海が見えた。とても鮮やかといえるような景色ではなく、咽返りそ  
うな白い光の  
中にあらゆる境界が溶け込んでいて、うっすらと埃を被っているようであり、眺めているとこち  
らの意識まで  
ぼんやりと濁ってしまいそうである。

この光景に懐かしさを感じられるほどの経験など彼女にはなかったが、どうしてなのか、これら  
をもうじき  
手放さなければならぬことが酷く耐え難く思われた。もちろん彼女は行く。行かないというこ  
とに現実として  
耐えられるはずがなかった。

けれども彼女らがここで永遠に立ち尽くすだけの存在になれないことは、一瞬彼女を通り過ぎ  
た幸せが  
もたらした悲惨である"

彼はもうこれ以上書くことなどできないくせに、しつこく黒い芯で紙を突いて、何かの拍子にこ  
の続きを  
思いつけるつもりでいた。布団の中で腹這いになっているので頭は火照るのに、白い紙の上へ晒  
した指先  
だけが冷え固まっている。

これは子どもを生むことを恐れる若い女が、自分の娘を当たり前に慈しみながら二人で坂道を  
上っていく

という幻を見る話なのだが、幻から覚めた彼女がどこに居るのか、何を思っているのかという件  
になると、

彼の目の前は真っ暗になるのだった。

彼が書くためには映像が必要だった。それは光景を見渡せる全体像であったり、人物の視野だっ  
たり、  
映像でありながら聴覚や触覚そのものであったりするのだが、これらの別々のものが、既にあっ  
た時間の

ように、目蓋の端辺りできちんと流れていくのだった。

この映像のようなものを彼は放っておくことができなかった。映像の原形はふいに思い浮かん  
だり、

眠っているときの夢であったりするのだが、一旦その存在を意識すると、忽ち完成させることに  
偏執して

しまうのだ。それは際限なく映像を繰り返していく内に作中の人物と一体化し、いつか経験した  
自分の感覚で

肉付けしていくという終わりのない作業のはじまりだった。

彼は偏執から逃れるために、何とかして再現可能な形でこの映像を頭の外に取り出さなければ  
ならなかった

が、逆に映像が彼にそう要求する力を感じることもあった。

そこで彼はごく自然に書く（文字にする）という手段をとった。そのまま映像にすれば良いの  
かも

しれなかったが、あの光景をそっくり作り上げるために何をすべきなのか分からなかった。け  
れども映像を

自分の言葉に置き換える作業では、彼は自分の持つ勘を働かせることができた。使いたくない言  
葉を切り捨て、

ふさわしいものを選び取る基準を持っていた。段階を踏むと現れるささやかな仕掛けを考えるこ  
とができた。

しかし筋道を立てて書きはじめるわけではないので、いつもこうして映像がぶつりと途切れて  
やむなく

終わる。形が残って再び迎えることが分かれると彼の執着は慰められて、敢えて思い出さなければ  
意識に上って

独りでに繰り返したりしなかった。

低い天井に吊り下げられた蛍光灯から、じりじりと虫の鳴くような音が聞こえる。夜中の二時を

回って

目蓋も半分に垂れ下がっているのだが、彼はそれ以上に空腹感が耐え難くなっているのに気付いた。痛いのではないけれど、本当に飢えているとしか言いようのない辛さだなぁと言葉の妙に感心する。こんなときに限って家の中に腹が膨れるようなものは何も残っていなかったのだから、彼はやけになって、このまま朝まで空腹を抱えてやり過ごすよりは、どんなに寒くても今すぐコンビニにでも出かけて行って温かいものを食べて満足したい気になった。

まだ面倒臭がる気持ちも多分にあったが、彼は自分でも驚いたことに、それから床に転がっていた眼鏡をかけてのろのろと身支度をはじめていた。